

保護者とのより良い関係作りのためにできること

八巻 秀

1 学校での事例は「人間関係」の問題

学校には様々な「人間関係」が存在しています。子ども達同士の関係、子どもと教師の関係、教師同士の関係、教師と保護者の関係など、他にも事務職員や用務員などを含めて、学校ではたくさんの人が関わりあっています。そんな学校という場の中で、その構成メンバーとの多様な「人間関係」が、日々繰り広げられているわけです。

学校では、日々刻々、様々な問題（＝事例）も発生しています。学校で何らかの事例が発生した場合、当事者に限らず、必ず、そのまわりの様々な「人間関係」が絡んでいるもの。つまり学校における事例は、ある意味「人間関係の問題」が生じているのだと考えてよいでしょう。

その点では、学校関係者は、いわゆる「心」よりも「関係」に注目するモノの見方が必要になってくると言えるのではないのでしょうか。

アドラー心理学の創始者アルフレッド・アドラーが「人間の悩みはすべて対人関係の悩みである。」と述べたことは有名ですが、このような「人間関係」「対人関係」を重視することも、アドラー心理学の基本的な考えの1つになっています。

それは「対人関係論 interpersonal theory」あるいは「社会統合論 social embeddedness」と呼ばれていて、「人間のすべての行動は、必ず相手役がいて、対人関係上の問題を解決する目的で、発動・実行されていく」と考えています⁽¹⁾。

ちなみに相手役とは、「その人の行動によって自分が影響を受け、特定の感情を抱き、なんらかの応答をする人のこと」⁽²⁾を指します。ある人のある行動の本来の意味を理解するためには、その人の対人関係（あるいは社会文脈）上において、その行動を起こすことが、どのような影響を及ぼすのかを考える。つまり、様々な事例は一人ではなく、必ず「相手役」との対人関係で発生する行動と考え、その行動の「意味」は、その人の心の中にあるのではなくて、その人と「相手役」の人の対人関係に及ぼす影響から、判断・理解することができると考えるのです⁽³⁾。

このような「対人関係論」に立って考えてみると、ある人物の問題行動に対して、その人自身だけの心理的な原因を考えない、あるいは原因探し（＝悪者探し）を重視しなくなります。なぜならば、対人関係論的に考えると、その問題行動は、その人とその相手役との関係の中で起こっていると考えられるからです。このような考え方は、家族療法などで言われているシステム論を重視したセラピーなどと同じ発想といえるでしょう。

アドラーは「人生を社会的な関係の文脈と関連づけて考察しなければならない。」⁽⁴⁾と述べているように、人は、ただ社会的文脈においてだけ、個人となると考えていました。その人の行動や心理を社会全体も含めて理解していくことが、問題解決につながっていくという発想を提供しているのが、「対人関係論」の考え方なのだと思います。

このようにずっと「人間関係」に注目してきたアドラー心理学が示す様々な考え方を、教師やスクールカウンセラーそして保護者も、ともに学ぶことによって、学校での様々な「事例」（＝「人間関係の問題」）の解決に貢献できることは多いと思われれます。

2 いわゆる「学校問題」について

ところで近年、学校現場では「学校問題」という言葉が使われるようになってきました。それは、学校への生徒の保護者や地域住民の要望が、近年になって多様化・複雑化したこともあるのか、学校関係者と保護者などとの間で生じてしまった、「学校だけでは解決困難な問題」のことを指す言葉が「学校問題」です。ここで言う「学校だけでは解決が困難な問題」とは、保護者などから理不尽な要求が繰り返し行われ、かつ、学校での対応には時間的・精神的に限界があるという状況を指しています。

一時期マスコミでも取り上げられたいわゆる「モンスターペアレント」という対応に困った保護者のために教員が翻弄されている問題などを指している言葉でもあります。

東京都教育委員会では、二〇〇八年からこの「学校問題」の実態を調査するために、学校問題検討委員会を設置して、都のすべての公立学校に調査を実施してきました。その結果、約1割の学校で、学校だけでは解決が困難な問題が発生しているという結果が得られたそうです。

調査では、そのようなケースのうち半数以上は、学校の初期対応に問題があったものが多く、保護者などからの苦情は、学校側の対応の仕方にも原因があるということもわかってきました。学校側の保護者への対応能力、あるいは関係作りへの配慮が問われる時代が来ていると言えるのでしよう。

このような「学校問題」を構成する「保護者と教師」あるいは「保護者とスクールカウンセラー（以下SCと略）」との初期対応も含めて、より良い関係の作り方について、人間関係を重視するアドラー心理学では、どのように考え、取り組んでいくのかについて、さらに考えていきたいと思えます。

3 事例「入れ墨をした保護者」

ここで「学校問題」をイメージするために、架空事例を一つご紹介しましょう。

高橋さん（仮名）は三〇代後半の自営業を営む、小学校一年の娘（ひとみ）を持つ父親です。二年前に離婚をして、現在は娘と自分の母親であるおばあちゃんと三人暮らしをしています。高橋さんは痩せ気味でちよつと強面、少々ヤクザ風の風貌でした。娘の入学式には、何とサンングラスにTシャツ姿で来校し、当たり前ですが、かなり目立っていました。実は保育園の頃も、保育園側とトラブルあったとの情報も事前に小学校に入っていて、娘の入学前から要注意人物ではありました。小学校入学後は、高橋さんの娘に対する関わりはとても熱心で、4月中は毎朝学校に娘を送ってきていました。5月になり、担任から高橋さんに「もうひとみちゃんは一人で学校に來させても大丈夫ですよ」と伝えますが、高橋さんは「いえ、物騒な世の中で行き帰りが心配なので」と言って、送りは父親が、帰りはおばあちゃんが毎日送り迎えをしていました。

やはり噂で高橋さんの体中に入れ墨をしているらしいという話がありました。担任が6月に家庭訪問をした際、自宅居間に通されると、居間にはいくつか刺青の写真が飾られていて、ますますヤクザイメージを高めることになりました。ただ実際話してみると、いたって口調や物腰は普通で、おばあちゃんとともに娘のことをとても可愛がっていて、また教育にも熱心な様子が見取れました。家庭訪問を終えた直後の担任の印象も「おばあちゃんと二人で一生懸命娘を育てているよ。うだし、（見かけとは違って）教育熱心な父親だな」という感じでした。

6月末になってクラスの席替えをしたところ、その日の夕方に担任に高橋さんから電話があり、「席替えで隣になった男の子は落ち着きがなく、授業中も立ち歩きをするので、娘は嫌だと言っている。」と訴えてきました。それに対して担任は「席替えの教育的意図」について説明したところ、次第に高橋さんは電話口で怒り始めました。その場はなんとか謝って納めました。翌日から朝娘を学校に送ってくるたびに、担任を見つけては席替えについてのクレームをするようになりました。結局、それに押されるように担任は翌週に仕方がなく新たに席替えをしました。

その後、一度クレームはおさまりましたが、半月後にまた高橋さんから電話があり、今度は後ろの児童が娘にちよっかいをかけてくることにクレーム。そしてまた毎朝のクレームが始まりました。それに対応していた担任も、次第に恐怖感さえ覚えるようになりました。

そこで担任は、学年主任や副校長に相談し、高橋さんと担任と副校長も交えての面談の機会を持ちました。その面談で高橋さんは「娘は後ろの生徒に授業中に何度もちよっかいをかけられて、迷惑している。学習したいのにそのために集中できないと訴えている。学校は勉強する場なんだから、それに集中させてあげるのが親と教師の役目。当然席替えをしてほしい。」と主張。担任と副校長がやんわりと、何度も席替えするのは子どもたちにとっても落ち着かないこと、子どもたちの成長を待ってみましょうと伝えますが、「成長を待っているうちに勉強が遅れてしまったらどうするんだ！」と次第に威圧的な態度になってきて、十分な話し合いにならず、平行線のまま面談は終了しました。

その後も変わらず、高橋さんの登校時や電話でのクレームは続きました。その後、SCも加わって何度か話し合いの機会を持ちましたが、話はずっと平行線のまま。SCからも「典型的なモンスターパーアレントですね。」と解説はされるが、解決の策をたてるには至らず、渋々あらためて席替えをするものの、その度に何かしらいちゃもんをつけてくる感じでした。次第には「同じクラスの〇〇さんは、クラスの雰囲気乱すので、転校させてほしい。校長と話がしたい」というまさに理不尽な要求までしてくる始末。校長も含めて学校側はこの高橋さん対応にほとほと困ってしまいました。

さて、このようなケースに対して、あなたが担任や学校長、あるいはSCだったら、どのように対応していきますか？

4 「学校問題」にある心理学的背景とは？

この事例で示したような「学校問題」の心理学的背景にあるものを考えてみましょう。基本テーマとしては「学校と家庭（あるいは地域）との関係の在り方」になるのでしょうか。学校の中心は子どもであり、それを支える教職員がいる、学校内での最も多くある人間関係は「子どもと教師の関係」になります。「生徒指導・生活指導」という言葉があるように、これまで教師にとっては、その「児童生徒との関係」にはエネルギーを注いできました。

しかしながら、「保護者指導」という言葉はありません。せいぜい「保護者対応」という言葉あるにしても、「保護者と教師（あるいはSC）との関係」については、これまでそれほど重要視はされてきていなかったというのが現状でしょう。

近年「学校問題」として、これまであまり取り上げられなかった保護者と教師の関係が、こじれて事例化してしまうことが増えてきた心理学的な背景には、いったい何があるのでしょうか？

そのキーワードとして考えられるのは、「怒り」のなどの「陰性感情」です。

前述の事例の高橋さんも、クラスの席替えをきっかけに「不満」や「怒り」などの「陰性感情」を担任や学校側に対して持つようになり、次第に学校側に理不尽ないちやもんをつけてくるようになっていきました。いわゆるマスコミの言う（事例ではS Cも言っていました）「モンスターペアレント」になってしまっているのでしょうか。教師側もS Cも高橋さんに対して、「入れ墨」なども含めているようなエピソードから「モンスター的な」先入観をもってしまい、その上での対応になってしまったことも、理解しあえる可能性をしばめて問題をこじらせてしまった要因になっているのかもしれない。

しかしながら、保護者に対して、「モンスターペアレント」というイメージを、学校側の関係者が一人でももってしまうと、明らかに状況が保護者と学校の対立を煽る方向に働いてしまいがちです。どんな場合でも学校と保護者との協力関係が、望ましい教育のあり方ですから、両者の関係作りにおいて「モンスターペアレント」というイメージが阻害する可能性は高いと思われます。

でも当事者は、つい「モンスター」と考えてしまううなぜでしょう？

マスコミからの影響という点も無視できませんが、心理学的な観点から考えてみると、学校関係者がある保護者に対して「モンスター○○○」と考えてしまうのは、それが「学校に対して強い怒りを持っている存在」だから、とも言えるかもしれません。あるいは、保護者と学校の間に「怒りが介在してしまっている関係」が、出来上がってしまったからとも表現できるでしょう。

学校に強い「怒り」を向けている保護者との関係をどのように作っていくか、あるいは、この「怒り」にどのように対処していけば良いのか、といった「怒りの感情をめぐっての対応の仕方」は、実は教師やS Cは苦手とする、あるいは、あまり馴染みのない部分でしょう。「怒り」に限らず、教師やS Cは「強い陰性感情」に対して、意識的にきちんと対応できる能力が、今は教師やS Cには問われているのかもしれない。

つまり、「怒り」のような「強い陰性感情」に対応していくために、あらためて「感情への考え方」と「感情への振る舞い方」を教師やS Cとして、一度整理して考えてみる必要があると思われる。

ちなみにアドラー心理学は、この「感情」に対して一つの考え方を提示しています。では、それはどのようなものなのか、次に示してみたいと思います。

5 「怒り」には目的がある…アドラー心理学の「感情」に対する考え方 その一

アドラーは人間の行動を「目的論」というもので理解しようとした^⑤。怒りなどの陰性感情も同じで、アドラー心理学では、「怒り」の感情も何らかの目的のために作り出されるという

「目的論」で考えます。

ですから、人が誰かあるいは何かに対して怒るときは、

「怒りの感情を使って、相手や状況をコントロールしようとしている」

「怒りの感情を使って、相手より優位な立場になろうとしている」

というような考えてみようとアドラー心理学では提案しています。

つまり、怒りの感情が沸いたから怒っているのではなく、自分の思うような状況を作りあげるために、もしくは相手をねじふせて言うことをきかせるという目的のために、怒りの感情を自ら作り

上げて怒っている、と考えるというのです。別の言い方をしてみると、大声を出して怒り、相手をコントロールするという目的のために、怒りという感情を捏造している、感情は何らかの目的を達成するための手段になっている、とも言えるでしょう。

例えば、前述事例の高橋さんの怒りは、例えば「娘が友だち関係でつらい思いをしているのを助けない、子どもを守りたい」という目的があつて、その目的を達成するために、怒りの感情を使っている、という一つの仮説が考えられるわけです。

では、なぜ悲しみなどの感情ではなく、怒りの感情を使うのでしょうか？

岸見(二〇一〇)は、「アドラーは、怒りは人と人を引き離す感情である、と知っている」と指摘しながら、感情の目的について次のように述べています。

何かをする、あるいはしないという目的がまずあつて、その目的を達成する手段を考え出す。怒りという感情が私たちを後ろから押して支配するのではなく、他の人に自分のいうことをきかせようとして怒りを使う。また、他の人からの同情を引くために悲しみの感情を創り出すのである。⁽⁶⁾

つまり、人は「怒り」の感情を使って、他人(＝相手役)を巻き込み、コントロールしようとしていると考えられるわけです。怒りは、怒りそのものだけで成り立っているわけではなく、その根底に「〇〇であるべき」「〇〇しなければならない」という、その人固有の思考や信念があり、それらから外れる出来事が誰かによって引き起こされたとき「なんでそういうことになるんだ！」という怒りが発生すると考えられます。

当然、それに対して怒りをぶつけられた相手役は、そうなるまいと自然に抵抗感や嫌悪感が起こってくるでしょう。あるいは自分の方が主導権を取りたいと同じような怒りが起こることもあります。「怒りの伝染現象」です。怒りの感情は「伝染」します。一方が怒りの感情を持つと、もう一方にも伝染して、お互いの怒りの感情がエスカレートする現象は、喧嘩などでよく見られる光景ですね。その怒りの始まりがどちらからであつても、いずれかが怒りの感情をコントロールしようとするのが、この怒りの伝染現象から逃れる第一歩になります。

6 「怒り」は二次感情である…アドラー心理学の「感情」に対する考え方 その二

さらにアドラー心理学では、怒りというのは、二次的な感情であり、その前に一次的な感情(＝背景的な感情)として、「恐れ」「不安」「焦り」「寂しさ」などがある、と考えています。この一次感情が満たされない時に、怒りという二次感情を使って対応することが多くなると考えるのです。怒りの感情は、感情の中でも最も対人関係の要素が強い二次感情であり、その背景にある一次感情がある、これを探ってみることに、可能であればそれを伝えてみることに⁽⁷⁾が怒りのコントロールにとって重要なのです。

例えば、高橋さんの場合は、娘を助けたいという気持ちの背景を考えると、娘がちゃんと育つかという「不安」があるのかもしれませんが。つまり、そこには離婚したために母親がいないという環境に対する不安感情を高橋さんが感じているからかもしれません。この高橋さんの一次感情である「不安」に思いをはせることが、高橋さんとの関係作りのポイントになりそうです。

岩井(二〇一四)^⑧は、アドラー心理学の立場から、そのような陰性感情をコントロールすることを含めて、次のように結論づけています。

① 感情は、ある状況で、特定の人(相手役)に、ある目的(意図)を持って使われる。

② 感情は、コントロールできる。要は、建設的に対応するか、非建設的に対応するかのカギは自分が握っている。

③ 感情は、(陰性感情も含めて)自分のパートナー。

「怒り」という強い陰性感情にとうまく付き合っていくためには、私たちがまずはこのような意識を持つことが、大切なのではないでしょうか。

8 事例の続き

ここで高橋さんの事例のその後をご紹介します。

学年が変わり、二年になると、少しひとみさんの友達関係が落ち着いて来たこともあり、高橋さんからのクレームが少なくなってきました。新しい二年の担任である加藤先生は、前年度からの引き継ぎで高橋さんのことは聞いていましたが、

「そういう態度になるのは何か事情があるからに違いない」

と思うようにして、あまり神経質にならないようにしていました。

夏前に三者面談があり、そこで高橋さんとお話する機会がありました。その時に思い切って「今年はまだひとみさんの友だち関係はとても良い感じできていますよ。ところで、昨年は、ひとみさんの友だち関係でいぶご心配されていたようですが、何かあったのでしょうか？」と率直に聞いてみると「いや、実はですね。…」と保育園時代に遡って話し始めました。

保育園の時は、元妻との離婚話で家庭の中は険悪な雰囲気だったと語り、その影響があったのか、ひとみちゃんは精神的に不安定になり、保育園でも友だちに手を出したり、すぐに泣き出したり、いじめにあったり、とあまり友達関係がうまく行かなかったとのこと。元妻の母親もその頃は保育園に行くことはなくなり、自分も仕事が忙しく精神的にも苛立ちがあったので、保育園との協力関係も作る余裕すらなかった。そのこともあって「ひとみには辛い思いをさせてしまいました。昨年はそれを引きずっていたのかもしれない。」とぼつりと高橋さんは語りました。それを聞いて、担任の加藤先生は、「そうだったのですか。我々もそのような事情を知らず、いろいろ配慮が足りなくてすみませんでした。でも、今はひとみちゃん本当に楽しそうに学校に来ていますよ。これはお父さんとおばあちゃんが、ひとみちゃんを支えようと本当に頑張っているからだと思います。こちら頑張っていきたいと思いますので、これからもどうぞよろしくお願いします。」と伝えると、高橋さんはパツと明るい顔になって、「こちらこそ、どうぞよろしくお願いします!」と応えてくれました。

面談後、加藤先生は「いろいろな家庭の事情があるんだ。それはじっくりお聞きしないと、ホント見えてこないものだよな」としみじみ思うのでした。

9 アドラー心理学における「感情」に対する振る舞い方

感情のコントロールを少しずつ始められたら、保護者とのより良い関係を作るための次なる一歩は基本的には「勇気づけ」の振る舞いが必要になってくるでしょう。

勇気づけについては、この本の中でもいろいろ言及されていると思いますので、ここでは保護者とのより関係作りに関係するものに絞って確認したいと思います。

保護者への勇気づけの関係作りの第一歩として、「相手の事情を想像する」ことが大切になってくると思います。

先ほどの事例における新しい担任の加藤先生は、一年時の一連の高橋さんと学校側との出来事に對して「そうなるのは、高橋さんに何か事情があるはず」と考えて、高橋さんに対してネガティブな先入観を持つことがなかったことが、まずこの事態を超えるための大きなスタンスになっていたのだと思います。

勇気づけの一つに「人と行為を分ける」というものがあります。

いわゆる「罪を憎んで、人を憎まず」「やったことはまずいけど、その人そのものは悪くない」と考える、あるいは相手の行動と相手の人格を分けて考えることでもあります。

このように考えられるためのコツは、起こっていることに對して、まず

「何でこんなことをやったのか？」 「この行動の意味は何だろうか？」

という疑問形で考えてみるのがポイントになります。

加藤先生は、自然にこのような気持ち「なんで高橋さんは怒ってばかりいるのか？」という素朴な「疑問」から、「きつと何か事情があるに違いない」とシフトしていきましました。つまり人と行為を分けるのは、その間にしっかりと「疑問」そして「事情」をはさむことと言えるのではないのでしょうか。

このようにして相手の「事情」を想像しながら、探ってみることは、前述した一次感情と同じようなスタンスかもしれません。このような相手の「一次感情」や「事情」に對して、想いを馳せながら探っていくことは、相手との「横の関係」を作ろうとしていることにつながります。

アドラー心理学では、「すべての人間は対等である」と考えているように、「横の関係」とは、年齢や地位・性別などあらゆる違いに関係なく、「互いを対等の人格として」認め合う関係のことです、お互いが自立した個人として信頼しあう関係とも言えるでしょう。

反対は、主従関係とも言える「縦の関係」ですね。怒りはタテを作り出そうとしますし、縦の関係は怒りを生みやすいもの。「学校問題」が発生しているのは、学校と保護者などの当事者が縦の関係になっている、その主導権の取り合いを行っていることは示しているのです。

アドラー心理学では、前述したように、怒りを含めて陰性感情は、相手を動かす目的で使われることがほとんどであり、主導権争いを起こす「縦の関係」を強化するために使われると考えます。それに巻き込まれずに、まずは相手の「一次感情」や「事情」を想像してみることは、縦の関係ではなく、相手との対等な「横の関係」を作っていく力になります。

「横の関係」を作ろうとする姿勢から、そこに「協力し、勇気づけ合える場」が生まれてきます。子どもがより良い教育環境のもと、互いに協力しながら、勇気づけ合いながら、より良い教育が行われることが、学校関係者も保護者も求めていることは確かなのですから、共に横の関係を作って行こうとするのは、間違いなく学校教育における共通の目標になるはずです。

10 まとめとして…保護者とのより良い関係作りのために

これまでのことを整理したいと思います。本稿では「保護者とのより良い関係作り」を考えるに

あたって、「学校問題」という近年問題になっている「怒り」が介在している困難な関係を例にと
って考えてみました。その「怒り」のような陰性感情が介在する関係に教師やSCが対処できるよ
うになっていくためにも、次のように考え、振舞っていくことが大切です。

① 「怒り」などの感情は一次感情である。そこには、必ずその背景にある二次感情が存在す
る。それは何かを考えてみようとする事。

親の子どもへの思いが強ければ強いほど、そこには子どもの現在と未来に対する「心配」「不
安」はつきまとうもの。そのような一次感情から、二次感情としての「怒り」が生まれやすくなる
ものです。「怒りの背景に、何かしらの一次感情がある。」と考えることが大切です。

② 保護者とその感情をしつかり分けるために、「事情」を想像しながら、関わる事。

「怒り」という感情やそれに伴う行動と、それを持っている親そのものを分けていくためには、
そうなることへの「疑問」や、そこから派生する「事情」を想像してみる事。

③ 基本は常日頃の協力的な「勇気づけあう」関係を作っていくことを心がける。

子供を育てる・教育することは一人ではできません。一人で抱え込まず、保護者と教師、SCが
ともに励ましあいながら、横の関係を作りながら、勇気づけ合い協力していく関係を心がけるこ
とが大切です。

以上のようなモノの見方や振る舞い方をしていくことによって、日常での学校と家庭との良好な
関係を作ることができ、まれにある「学校問題」における「怒りが介在する関係」ができた時
にも、「怒り」をどのように扱っていけば良いのかというスタンスが定まっていけます。

アドラー心理学が提供する考え方は、学校関係者の保護者への関係作りに対しても、このよう
な視点を与えてくれます。

【文献】

- (1) 鈴木義也・八巻秀・深沢孝之『アドラー臨床心理学入門』アルテ、二〇一五年、四七頁
- (2) 岩井俊憲『マンガでやさしくわかるアドラー心理学』日本能率協会マネジメントセンタ
ー、二〇一四年、一八八頁
- (3) (1)、五〇頁
- (4) アルフレッド・アドラー(岸見一郎 訳)『個人心理学講義』アルテ、二〇一二年、二八頁
- (5) (1)、三〇頁
- (6) 岸見一郎『アドラー 人生を生き抜く心理学』日本放送出版協会、二〇一〇年、一七九頁
- (7) 八巻秀『スッキリわかる！アドラー心理学…人生を変える思考スイッチの切り替え方』ナ
ツメ社、二〇一五年、九八頁
- (8) (2)、一九四頁